

毛利貞斎『増続大広益会玉篇大全』 の合口拗音ハ表記について

佐 藤 進

一 漢字音の合口拗音ハ表記

本論で扱うのは、漢字の日本漢字音、いわゆる音読みのなかに見られる合口拗音のカナ表記にかかわる問題である。

拗音の現代の表記では「キャ・キュ・キョ」のように小さい「ヤ・ユ・ヨ」を用いる。過去にさかのぼると、ヤ行の拗音のほかに、「菓子クワシ」「三月サングワツ」のようにワ行の拗音があった（つい先ごろまでは方言でそのように発音されたという）。このヤ行拗音を開拗音、ワ行拗音を合拗音という（日本語学会 2018）。合拗音は明治に入ると拗音性を失い、「菓子カシ」「三月サンガツ」のように直音になってしまった。

開口合口の概念は中国音韻学でも使う用語であるが、中国音韻学の開口合口と、日本語学で使う開口合口とはそのまま重なり合うものではない。しかしながら、中国音韻学の合口と切り離して扱うのは、漢字音の由来等を論ずる際の手がかりを失うことになるので、本論では中国音韻学の合口の枠組みを利用した^(注1)。単に合拗音と言わずに、合口拗音という所以である。

上に示したように、合口拗音はワ行拗音であるというのが一般的であるが、ワを使うほかにハを使うことがある。合口拗音ハ表記は、日本の古字

書などに見えるのであるが、そこに記述された和訓の研究は多数の積み重ねがある一方、漢字音に関することについては手薄であり、本格的に論じられることはほとんどない。漢字音拗音のハ表記は、訓読み、すなわち和語の「いわ（岩）」をかつて「いは」とかな表記したこととは別の問題であって、決して同日に談すべきことではない。

室町時代一五八九年に、キリスト教徒の手によって成立刊行された辞書『落葉集』では、「光くハウ」「果くハ」「月ぐハツ」などのように、一貫して「ハ」表記が使われた（ハはカタカナではなく、「は」の変体仮名である）。その理由について筆者は、第一に、当時の「ハ」はすばめた両唇摩擦で発音されたこと。第二に、『日葡辞書』などのローマ字では quau・qua・guan のように表記されたが、『落葉集』はカナ表記にするために、たとえば「願」guan を「ぐあん」とすると「愚案」との区別がつかなくなるので、ローマ字を単純にカナ転写する「ぐあん」を避けて「ぐハん」と転写した。そのほうが、かえって当時の口語音に近づくことが出来たと論証した（佐藤進 2014）。

また、佐藤進 2014 では、『保元物語』の金刀比羅宮旧蔵の写本（岩波書店の旧日本古典文学大系の底本）には日本人にはそこまで必要がないほど詳密な振り仮名が施されており、その振り仮名の工具書として使われたのがハ表記の『落葉集』であったことを立証し、かつ、『落葉集』採用の理由が、欧人宣教師にとっては『保元物語』が日本語学習の良質な教材の一つとみなされたからではないかと論じた。

合口拗音ハ表記について、従来ほとんど見過ごされてきた問題ではあるが、『落葉集』と『保元物語』との関連、すなわち、欧人宣教師と軍記物語の関係を裏付けることが出来たように、文字文化事象の解明に資するところが小さくないのである。

二 毛利貞齋と『増続大広益会玉篇大全』

元禄第五壬申暦大呂中旬、すなわち一六九二年十二月中旬の刊記がある『増続大広益会玉篇大全』という漢字字書がある。宋代に改編された『玉篇』に、明代の『字彙』などによって増補し、漢字音や和訓を付した漢字字典である。なお、『玉篇』はもと梁の顧野王が五四三年に詳密浩瀚なものを完成させたが、中国ではすでに失われて、日本に原本の十二～十三%が残るのみである。それを原本『玉篇』という。宋代の一〇一三年に改編された『玉篇』の正式名称は『大広益会玉篇』といって、大広益会と冠してはいるが、語釈や例文は大幅に削られて、原形をとどめない。

『増続大広益会玉篇大全』はその『大広益会玉篇』に増続した大全であるという意味になろう。編者は毛利貞齋であることが、元禄第四辛未暦大呂穀旦、すなわち一六九一年十二月吉日の日付を持つ「凡例」（首巻に収録）に示されている。「洛瀧隱士毛利貞齋編」。洛瀧（ラクゼイ）は洛水のこと^(注2)で、本邦では京都の異名として書鋪の所在地名などに使われた。「隱士」と自称するのは、官職につかず、講義や著述を業としていたからであるらしい。

毛利貞齋の生卒の確かなことは不詳である。貞齋と『増続大広益会玉篇大全』の書誌については、もと慶應義塾大学斯道文庫長・関場武教授の論文に詳しい（関場武 1977）。それによると、各種辞事典の貞齋の記事は、池永泰良『諸家人物誌』（寛政四年刊）の以下の記述を踏襲するという。

「毛利貞齋、名ハ瑚珀、字虛白、貞齋ハ号ナリ、浪花ノ人、京師ニ舌講ス、諸書俚諺抄ヲ著シテ梓行スルニ、皆自ラ筆ス、其敦厚ナルヲ見ツヘシ、著述甚富テ、業、字遜庵ト雁行ス」

記述の最後にある宇遜庵とは、江戸前期の朱子学者・宇都宮由的（一六

三三一一七〇九)のことである。『先哲叢談』卷之四に伝がある。また、上の記述に續いて貞齋の著作三十二点を列挙しているという。

貞齋の生卒は不明ながらも、関場教授は貞齋の著述を刊行年順に考察して、その活動期間は延宝三年(一六七五)から享保十年(一七二五)に至る約五十年であったとしている(関場武1977)。してみると、元禄四年(一六九一)の『増続大広益会玉篇大全』は、十分に経験を積んで、しかも体力気力の衰えが見えない少壯の時期の仕事であったわけである。

『増続大広益会玉篇大全』は初版以来、(一)元禄五年版・後印二種、(二)享保二十年版・後印三種、(三)安永九年版・後印二種、(四)天保五年版・後印二種、(五)秋田藩明徳館版・後印二種、(六)無刊記本二種、(七)嘉永七年版・後印十七種、(八)文久元年版、(九)明治五年版・後印二種、(十)明治八年版、(十一)明治十年版・後印二種、(十二)明治十一年版、(十三)明治十三年版・後印六種、(十四)明治十六年版・後印五種、(十五)明治三十八年版、(十六)明治四十二年版、(十七)明治四十四年版、以上のように多くの版を重ねた(関場武1977。なお後印の数については、関場武『近世辭書論攷』収録時に補充されたものを含む)。江戸明治の漢字字典と言えば、まず『増続大広益会玉篇大全』に指を屈するのである。ちなみに筆者の家蔵は秋田藩明徳館版の初印十二冊本と明治三十八年版洋装一冊本である。

三 『増続大広益会玉篇大全』の合口拗音ハ表記とワ表記

ここでは、『増続大広益会玉篇大全』の合口拗音ハ表記とワ表記を掲げる。手元では表組を作成したが、誌面の版式にはおさまりが良くないので、以下に箇条書き形式で示す。

クハ・クワ等の音読みの右、【】内に示したのが、その読みが与えられ

た見出し字である。ただし、該当するすべてを掲げたのではなく、使用例に乏しく、「与〇同」とのみあって、〇字の異体字であるものなどは、〇字のみを採録した。『説文解字』の異体字とも言うべき「古文」「籀文」なども採録していない。

採録すべき文字で、ユニコードで入力できなかったものもあるが、そういう僻字は十指に満たなかつた。省略しても差し支えがないものと思う^(注3)。

採録字の右に（）で示した二字は、いくつかの読みがある中で、その読みが与えられた根拠となる反切である。まれに「音某」のような直音表記（非反切表記）もある。

】の次につけたコメントは、誤刻等のメモである。

●果攝合口一等

平声戈韻

見母

クハ【戈囉𠂇渦渦痴芟鷗（古禾）鷄鳴鍋鳩鷗】

溪母

クハ【鍋斜斜鍋筍薺】

クワ【科窠】

羣母

グハ 【謔謔】

クハ【触（音訛）訛蹠】

七

ゲハ【謫謫鮓(午戈)】

クハ【触（音訛）訛蹠透（五糸）】

ゲワ【咄】

匣母

クハ 【啗栎牋茱誅】

クワ 【和禾龢】

グワ 【禾（五叱）】

上声果韻

見母

クハ 【孟裸縲縉裹襯牒鰥鰥鰈】

溪母

クハ 【穀（口果）棵（苦果）牒顆】

疑母

グハ 【暎】

グワ 【厄】

曉母

クハ 【火夙】

匣母

クハ 【鴟沃瓢禍暎祫𧆸】

クワ 【夥甕𠀧】

去声遇韻

見母

クハ 【揭輶榾稽（公臥）詛】

クワ 【過鋏】

溪母

クハ 【尗牒凜綏菴課駢𩚨（口臥）】

疑母

グハ 【臥】

曉母

クハ 【汎貨】

匣母

クハ 【絃】 胡臥切を朝臥切に誤刻

クワ 【和榙団】

●果攝合口三等

平声戈韻

溪母

クハ 【哿鼈】

疑母

グハ 【杌趨鉢】

曉母

クハ 【鞶靴】

クワ 【吹】

匣母

クワ 【鉢】

●假攝合口二等

平声麻韻

見母

クハ 【廸別室划（公禍）歟浅澁焮（古誇）煖瓜瞷蜩蹠顫餌鴟】

クワ 【呱媯眡縕】

溪母

クハ 【呱滂夸姱袞華（苦媯）誇哿鴟】

疑母

グハ 【欣】

クハ 【脆弱】

曉母

クハ 【批毗花醸】

匣母

クハ 【萼憚找畢磅礴華蘢蟬譁鏗鏘闡鞞鶯鶯】

上声馬韻

見母

クハ 【偈剏呂另箇觸實跔（古瓦）】

クワ 【剏寡】

溪母

クハ 【唵哿垮垮幡鎗鞞】

クワ 【牛】

疑母

グハ 【柅屹耽邴甕】

グワ 【瓦砦】

匣母

クハ 【囀娥稞屮魁踝鞞（胡瓦） 鰥鰥鞞】 屮字、戸を戸にする。

去声禡韻

見母

クハ 【叱坬樺抓櫛膈（古華） 鮑】

溪母

クハ 【牛跨（苦化） 跤蹠跨蹠】

曉母

クハ【叱華樺蔚魄】

クワ【化七】

匣母

クハ【瓊揶揄柵竈】

●蟹攝合口一等

平声灰韻

見母

クハイ【傀嘍幌（沽回）懷瓊韁（吉回）鳴】

クワイ【瑰】

溪母

クハイ【匯（口乖） 億銖恢榦櫛恢銖盈謫詰闔（苦乖） 韶魁尉魁】闔字、

苦乖切を言乖切に誤刻

疑母

グハイ【梶（五回）阤（五回）鮑（午回）】

クハイ【鮋】

曉母

クハイ【啖啖捩輝穀啖啖灰爛(呼回)邪痕暉(呼回)啖隨(呼回)啖
銅瞿歎瘞】

甲母

クハイ【併回嵬徊洞痼癆（胡乖）禪荷茲癆蛸裹迴邪邪駢癆】

クワイ【煢】

上声晦韻

見合

クハイ 【掛（古拐）】

溪母

クハイ 【媿撊撊魂頬】

疑母

クハイ 【魄】

曉母

クハイ 【悔煤魄饋】

匣母

クハイ 【匣魔魄箇魔誦（戸罪）薦（胡悔）戴】

去声隊韻

見母

クハイ 【瞶（古誨）瞶憒櫛箇】

溪母

クハイ 【塊靄（苦對）蕡（音塊）】

羣母

クハイ 【因】

曉母

クハイ 【哿晦沫洄誨顚顙】

匣母

クハイ 【匱巣裏潰犧廻𧆔（音潰）媿諷讚遼閑審（胡內）煩顛】

●蟹攝合口一等

去声泰韻

見母

クハイ 【僧劄（公外）剗𠂇僧檜湧添滄猶瘡稽（公外）稽膾禪鄧餉體

鱗】

溪母

クハイ 【繪隕】

疑母

グハイ 【外】

曉母

クハイ 【噦（火外） 碓鉢（呼會） 鐵】

匣母

クハイ 【嶠旛會繪繪翻譏（音會） 遷】

●蟹攝合口二等

平声皆韻

見母

クハイ 【乖癡碌葦】

溪母

クハイ 【勅撢】

曉母

クハイ 【囁豨】

匣母

クハイ 【懷槐瀼麌鞞】

クワイ 【淮】

去声怪韻

見母

クハイ 【卷唔絅怪拔攘穀紺紺鮚】

溪母

クハイ 【剝匱匱匱匱匱匱匱】

クワイ 【蔽】

疑母

グハイ 【聾顎顎】

クハイ 【顎】

クワイ 【瓊（五怪）】

曉母

クハイ 【禦詰】

匣母

クハイ 【壞殲溼諧】

●蟹攝合口二等

上声蟹韻

見母

クハイ 【堯（乖買）】

去声卦韻

見母

クハ 【挂窪】

クワ 【卦】

クハイ 【盍（古拜） 硏（古拜） 罹】

疑母

グハイ 【顙（五壞）】

曉母

クハイ 【漸諧】

匣母

クハイ 【桎繻（胡卦）罣纏瓈】

クハ 【畫鵠霽難】

クワ 【畫（胡卦）】

●蟹攝合口二等

去声夬韻

見母

クハイ 【夬瓈】

溪母

クハイ 【喰快璉】

疑母

クハイ 【寃】

曉母

クハイ 【駐】

匣母

クハイ 【話】

●蟹攝合口三等

去声麌韻

疑母

クハイ 【蹠】

曉母

クハイ 【稼稼縁】

●山攝合口一等

平声桓韻

見母

クハン【冠官棺帽肩田罐竈竈簾観】

溪母

クハン【寛獾（犬丸）竊臠臘體】

疑母

クハン【穢（牛丸） 践飫】

グハン【魂剥行究蛇貌覩】貌字、多をうに作る

曉母

クハン【膈奮懼膈歡讐鄙懼奮驩驩鶻鴟鴞】

匣母

クハン【丸烷完寔宾眉帙（胡官）垣𠂇挽桓洹濱還烷𠂇獮帙匱宣匱粗紩組
続匱麌鰐匱（胡官）萱莞（胡官）覓楂萑（胡官）𦵹𦵹蘆𧈚譙𠂇獮𢃠院
（胡官）崔鳩鵠鷗鷗】

グハン 【园猿麿】

クワン【鶴】

グワン 【峠】

カン 【完】

四

七

九月三十日【第六】

卷四

【七】

三

2

クハン 【徽椀榎款漱漣緩（火卯）】

匣母

クハン 【峠暖復曉冕棵（胡管）渢澣澣旛緩緩纊纊茂蘋椀覩鴟這鰯】

クワン 【浣】

去声換韻

見母

クハン 【暖冠櫃盜涪湧（古玩）灌瓘舊曜裸罐鉛貫觀賚鑽罐蘆鶴鶴
鶴】

溪母

クハン 【登鍼鯀】

羣母

クハン 【壹（求玩）】

疑母

グハン 【妩忼玩玩翫貺】

曉母

クハン 【喚囁囁喚囁囁喚囁囁喚囁】

匣母

クハン 【換喚喚棹穗疵耽耽骯黪】

入声末韻

見母

クハツ 【創懸括括梧梧聾聾苦落臙适銛頡（古活）骷鴟鴟骷】聾字、
口を日に作る

クワツ 【倨聾】

溪母

クハツ【脣跔闊闊】

クワツ【筈】

疑母

グハツ【相】

曉母

クハツ【麌姑呑汎濶（呼活）濶睂豁闇黽】汎字、戌を戊に作る

甲母

クハツ【活活活活活活活活】

クワツ【滔】

●山攝合口二等

去声韻

四母

クハン【幻】

入声黠韻

見母

クハツ【刮瞼膩鶲】

疑母

グハツ【拙（五滑）明頃（五刮）瞞】

曉母

クハツ【話】

甲母

クハツ【看昧惛惛旋滑猾畧敌話餳餩】

●山攝合口二等

平声刪韻

見母

クハン 【絲暗憐囁寰絳絳擗壞眎緋羈穢（古關）鰥饑關】

疑母

グハン 【頑】

クハン 【癡（五還）】

曉母

クハン 【懐愞】

グハン 【覃（呼關）】

匣母

クハン 【剝壞寰戊環權渙環鬟珮還緩鏗鏗鶯闌鱗鬟鵠纓】渙字、玉篇は于元切・于頑切の二切、クハンは『廣韻』の獲頑切によるもの

上声濶韻

匣母

クハン 【咷咷咷】

去声諫韻

見母

クハン 【串信慣攢擐（公患）殞蹠蹠芋（古患）轂遺鄆】

溪母

クハン 【權】

羣母

クハン 【權】

匣母

クハン 【宦患漶𤇱𩷶卽】

●山攝合口三等

去声線韻

見母

クハン 【卷】

曉母

クハン 【鞞】

●山攝合口三等

上声阮韻

見母

クハン 【鍵 (九偃)】

去声願韻

見母

クハン 【堦】「千」を「十」に作る

溪母

クハン 【勸】

疑母

グハン 【願願顛顛】

曉母

クハン 【鞞】

入声月韻

疑母

グハツ【朶月】

● 宕攝合口一等

平声唐韻

見母

クハウ【光姚桃洸禿牆牘珖胱趨輶驥鼠】

クワウ【恍】

溪母

クハウ【奢矯艶翫】

曉母

クハウ【帀幙幃曉瀧獮瓶穢繻荒菴鄙鄙(音荒)穢駁駁】

甲母

クワウ【穠穢】

上声蕩韻

見母

クハウ【完廣懶麌敲鷗】

溪母

クハウ【儻】

曉母

クハウ【爛齋恍惚暎焜（吁往）暎謬謬爛（虎晃）】暎字、朙を充に作る。

甲母

クハウ【幌幌旗晃曇謄櫻櫻混櫻（呼幌）瀘幌幌幕】

去声宕韻

見母

クハウ 【擴曠】 擴字、クハウは『廣韻』古曠切によるもの、大全の反切は古莫切

溪母

クハウ 【擴曠曠爌曠曠覶覶】

匣母

クハウ 【纊錫】

入声鐸韻

見母

クハク 【崕麌縛郭（同鄆）鄆曠鶴】

クワク 【擴】

溪母

クハク 【剗（口郭）剗廓廓轉（同鄆）饗蓐】

クワク 【靄】

曉母

クハク 【擢曜曜暋暋霍霍霧霧】

匣母

クハク 【護獲權（胡郭）濩濩聊穰穰藿藿霑霑（胡郭）餳餳】

●宕攝合口三等

平声陽韻

見母

クハウ 【亥（呼汪）糸】

曉母

クハウ 【亥（呼汪）鄙】

匣母

クハウ 【鄭】

去声漾韻

見母

クハウ 【誑（俱放）讕】

溪母

クハウ 【續】

匣母

クハウ 【帷】

入声藥韻

見母

クハク 【攬樟漷（括鑊）禡襍聊轢鑼鸚】

溪母

クハク 【簷鶲】

曉母

クハク 【攫瞶】

影母

クハク 【縛（於縛）】

●梗攝合口二等

平声庚韻

見母

クハウ 【咣橐罥臠饁躉鼈齧麌】

曉母

クハウ 【濶翁廳】

匣母

クハウ 【曠惶橫瀆竑諱鉉鑄鑄鑄楓飄鬢】

上声梗韻

見母

クハウ 【礪礶鑛】

去声映韻

匣母

クハウ 【嶸】

入声陌韻

見母

クハク 【新穀謔趨（霍號）】

曉母

クハク 【割惣擣】

●梗攝合口二等

平声耕韻

見母

クハウ 【腰】

曉母

クハウ 【蜀拘陶錫】

匣母

クハウ 【宏峩恂浹浹瀼瀼空紜眩】

入声麥韻

見母

クハク 【戯翫翫翫】

曉母

クハク 【剷嘯嘯挾渢濶瞞縷（呼麥）麌駢】

匣母

クハク 【嘵襲（胡麥）】

クワク 【畫（乎麥）】

以上は中国音韻学で合口とされるものの調査であるが、開合の扱いで、以下のような相違もある（下の諸字はデータに含まれない）。

開口を合口扱いしたもの。

クハイとする廉字の反切は苦海切となっており、音韻地位で示せば「蟹開一上海溪」であって、開口カイが正しい。

鶴字は何各切、音韻地位では「宕開一入鐸匣」であって、開口カクである。したがってカクとするのが多い中、これを貞齋はクハクとする。合口扱いにしてクワクにするのは、室町時代の文明本『節用集』であり（中田祝夫 2006）、クハクとするのが『落葉集』である。特にハ表記の後者は注目に値する^(注4)。

合口を開口扱いしたもの。

カ癟、カツ錯、キヤウ匡筐眶狂、ケイ圭（圭を声符にもつ奎・桂・畦・閨なども）、ケイ攜惠慧、ケツ決訣缺血穴厥懣掘（クツも）撻、ケン犬玄懸縣眩、コウ弘、などはいずれも合口であるが、貞齋は開口のカナをつけている。

さて、採録データをみてみると、ハ表記は一〇三六文字、ワ表記は五五

文字であった。つまり、九五% がハ表記、五% がワ表記である。非常に明確な傾向で、ハとワの「揺れ」というには偏り過ぎている。『増続大広益会玉篇大全』の合口拗音については、原則としてハ表記であり、時にワ表記が混入したと言って差し支えない。

四 『増続大広益会玉篇大全』の合口拗音ハ表記のよって来るところ

毛利貞斎は『増続大広益会玉篇大全』における合口拗音の漢字音表記に際して、該当字の九五% をハ表記にした。

貞斎の「凡例」には、音訓の付け方について「予 贅する所の音訓、舊本の反切（ホンゼツ・カヘシ）註釋に根（もとづ）く」という。旧本の反切というのは『大広益会玉篇』のことである。ただこれは原則論であって、たとえば渢字の場合、『大広益会玉篇』は于元切・于頑切の二切なのでエンとなるが、その上、貞斎は『廣韻』の獲頑切によってクハンの読みを加えた。ただし、その反切は追加していない。それはともかく、これだけ多量の漢字に音と訓を与える参考文献は、今日なら『類聚名義抄』や『色葉字類抄』や文明本『節用集』などの古写本の影印本が利用できるが、江戸前期ではそもそも行かない。当時にあって貞斎が参照した漢字音つきの字書類は何だったかを考えたい。

音読み訓読みを添える『玉篇』がらみの字書としては、室町時代に盛行して、江戸時代に整版が刊行された『倭玉篇（ワゴクヘン）』がある。岡井慎吾 1933 には写本刊本四十数点の紹介がある。また、岡井慎吾 1934 には、江戸時代の刊本には三十数種類あるとの報告がある。ただ岡井博士の報告は戦前の調査であって、戦後のものとしては中田祝夫・北恭昭 1966 に、写本三十数種、刊本九種（後で紹介する『小玉篇』を含む）が現存す

るという。

中田祝夫・北恭昭 1966 はそのうちの慶長十五年刊本の影印をして、索引を付したものである。なお、該書は内閣文庫蔵で、今は国立国会図書館デジタルコレクションで画像が見られ、ダウンロードが可能である。

いま慶長十五年版『倭玉篇』から合口拗音のハ表記をひろうと、クハ【鰐汎釣漁】、クハイ【佃湧鬻】、クハウ【驥鎧混飄鷗帯】、クハク【饅霏】、クハン【餓遺換鸕棺】、以上である。つまり、原則としてワ表記であって、ハ表記は「搖れ」の範囲にとどまると言ってよい。貞齋がハ表記を編集方針の原則とするほどの影響力を持ったとは言えない。

『倭玉篇』の刊本の中でハ表記が比較的に目立つのは、慶長十年刊、夢梅の編写した夢梅本である^(注5)。中田祝夫・北恭昭 1976 の「索引」は和訓のみが収録され、漢字音は捨て去られているので、影印本から採集するほかない。ここでは夢梅本の上中下三巻のうち、中巻からひろい上げたものを下に掲げる。ハ・ワ両表記の傾向を観察するにはそれで充分であろう。ちなみに、国立国会図書館デジタルコレクションでは中巻のみが閲覧可能である。

クハ【過罔嘔顆顛鞞屨裹】

クハイ【蜻迴遯邪隗噲噴徊頬頰旛旛】

グハイ【阤嚙】

クハウ【蟻鄰鄧鄧鄰喤曠咣宏窪徨轢煌】

クハク【郭嘽頹轢】

クハツ【蜎蜎适咷船櫓】

クハン【麌款歡遺還逭邇鄧鄧院暖唁旣寃寃寃串頬輶旛旛】

グハン【旣顛願頑旣】

クワ【蜎蠣蝌蟬貨歟旣過過邇郊和吹另寡棄嫋嫋姱媯】

グワ【叱】

クワイ 【魁敲鄙部顚櫛】

クワウ 【蝗遑隍窓鰐】

クワク 【蟻鷲】

クワン 【蟾阮賛嘽宦官寰窓】

以上のように、二群に大きく分かれ、ハ表記を原則としたとは言えない。貞齋の編集方針のモデルになったのは、夢梅本を含めて『倭玉篇』ではあり得ない。

『玉篇』を名乗る先行字書にこだわる必要もあるまいとは思うが、最後に、『落葉集』に含まれる『小玉篇』に着目してみたい。

『小玉篇』は『落葉集』の附篇として、いったん本体が出来てから編集印刷されたものである（土井忠生 1971）。現存する『落葉集』の諸本六点、断簡二点については土井洋一 1986 が詳しいが、現存諸本六点のうち『小玉篇』を含むのは、ローマイエズス会本部蔵本・大英博物館蔵本^(注6)・スコットランドクロフォード家蔵本・天理図書館蔵本の四点である。

『小玉篇』の冒頭にある前書きには、その編纂意図を次のように述べている。

「右落葉集は字のこゑを用ひていろはをついで、色葉字集はよみを以て記すれば、読こゑを知て字のすがたをしらざる時の所用をなすといへども、文字のかたちを見て其よみこゑをしるに道なき便として、右両編の内より今又此せばき玉篇を編畢」

『落葉集』の本体とも言うべき本編の音読み（=こゑ）いろは順「落葉集」と訓読み（よみ）いろは順「色葉字集」に出現する漢字を、字形から検索が可能なように、改めて部首順に配列したものである。「せばき玉篇」つまり小さな玉篇と、へりくだった命名をしたのは、「分量の軽少と卑下の意をこめて」のことであるらしい（土井忠生 1971）。「分量の軽少」とはどれくらいのものか、手近な解説書類には具体的な字数を掲げないので、

いま倉卒にカウントしてみると二三三三字であった。室町時代にキリスト教の布教に役立たせるための常用字として考えると、現代日本語の常用漢字の字数、二一三六字の約一割増であって、かなり妥当な収録字数であると言える。なお、部首の数は一〇四、一〇五番目には配属の厄介なもの一九五字を「類少字」としてまとめてある^(注7)。

その二三三三字の中で、合口拗音字は下がすべてで、一貫してハ表記を採り、ワ表記は皆無である。なお漢字の字形は『落葉集』では行書体で印刷された。

クハ 【瓜戈火花咲貨禾科果菓課誇袴掛禍鍋過瓦】

グハ 【臥】

クハイ 【灰徊廻槐塊会鱗絵怪懷嘆悔晦】

クハウ 【光荒皇遑広】

クハク 【郭鶴】

グハチ 【月】

クハツ 【活滑】

グハツ 【月】

クハン 【串官管棺冠翫閑寛貫鑪環巻換喚緩觀歛】

グハン 【歛頑丸願】

大切なことは、「揺れ」がなく、百分の九五%がハ表記であるという事実である。その編集方針が、毛利貞齋の九五%ハ表記に影響を与えたのではないかと考える。

どういう表記を基準とするかということが決まれば、あとは『大広益会玉篇』や『字彙』の反切に従って音読みを与えるだけである。『落葉集』は稀観な字書ではあったが、幕末にアーネスト・サトウが江戸の古書肆で求めることができたように、江戸前期に入手が全く不可能であったとも思われない。確かな記録はないが、貞齋は『小玉篇』を筆写して参照したと

も想像できる。

前章の最後の部分で、本来の開口を合口扱いした例として鶴字を挙げた。合口扱いにするだけでも決断を要する問題である上に、数ある古字書の中で、合口で、しかもクハクとするのは『落葉集』が唯一である。身近な漢字であるだけに、『落葉集』と貞齋の間に強い紐帯を感じざるを得ない。

五 『増続大広益会玉篇大全』合口拗音ハ表記のその後

元禄五年に世に出た『増続大広益会玉篇大全』は、先に紹介したように、江戸明治を通じて数多くの版が行われた。そうとなれば、その後の合口拗音ハ表記が世上に大きな影響を与えたと考えて不思議はない。実際はどうであったか。

まず、『増続大広益会玉篇大全』刊行後の貞齋自身の漢字音研究に、三点の『韻鏡』の研究刊行があった（福永静哉 1992）。福永静哉 1992 には一章を設けて貞齋の『韻鏡』研究を分析しているが、そこに収める『韻鏡袖中秘伝抄』の「直音拗音七音配當圖」を見るにクワ表記を探っている。当時、『韻鏡袖中秘伝抄』に先立つ数多くの『韻鏡』研究書が存在した上で、恐らくはそれらのワ表記を踏襲したものと思われる。

安永五年（1776）、本居宣長が『字音假字用格』において漢字音の在り方を論じて、後世に大きな影響を与えた。そこでは合口拗音ハ表記について「下中ノわ之假字」という項目を立てて以下のように述べている。「わくわ くわう くわい くわん くわく くわつ、右ノ諸音凡テわノ假字ナル事、上ノ第三會ノ圖ニテ明ラカ也、はノ假字ヲ書クハ大ニヒガコト也【凡テ三字ニ書ク字音ノ中ノ假字ハ、喉音ノや行わ行ノ字ニ限レルコト也】」（大野晋 1975）。ハ表記は「大ニヒガコト也」として退けられた。

本居宣長の批判によってハ表記は姿を消したかというと、事態はそれほ

ど簡単ではない。たとえば、安永九年（1780）、都賀庭鐘の校訂で『康熙字典』が翻刻刊行された（都賀の「序」は安永戊戌七年）。この『康熙字典』は単純な翻刻ではなくて、見出し字に漢字音を付し、本文に訓点を加えて刊行された。その合口拗音については、一貫してはいないがハ表記が見られるのである。たとえば、官クハン關クハン、一方、光クワウ廣クワウ。

また、元禄九年初刊で、江戸明治に盛行した单字字典『文選字引』というものがある（山田忠雄 1981）。その中にも、丸グハン乖クハイなどが見られ、一方、串クワン光クワウも混在する^(注8)。ちなみに、鶴字は『康熙字典』カク、『文選字引』ク Hak であった。

翻刻『康熙字典』や『文選字引』などについては興味が引かれるが、その全面的な調査報告は次の課題にしたい。

【注】

- 1) 十六撰・開口合口・四等・四声・二百六韻・三十六声類という枠組みであるが、具体的には、語言研究所 1981 によった。ちなみに、この枠組み「撰・開合・等・調・韻・声」を用いて、ある漢字の音韻情報を定義することを「音韻地位」という。例えば「家」は「假開二平麻見」と表す。個々の漢字発音の方言差異などを表現するときに便利である。
- 2) 「洛瀆」は酈道元『水經注』卷十五「洛水」に「南據嵩岳、北帶洛瀆」と作る対句に出てくるものである（「九山廟」前の碑文の一部）。「嵩岳」に対する「洛瀆」なので「洛水」と考えて間違いない。ちなみに、貞齋のほかの著作では「洛汭（らくせい）」「洛下」とも書かれている（関場 1977）。
- 3) ユニコード以外の文字はかなり少ないが、食部には例外的に多く、声府だけをメモしておくと、隶・科・黃・過・裹の五文字。
- 4) 中田祝夫 2006 によると、文明本『節用集』は名家に長く秘匿され、明治になってようやく存在が知られ、国語学者の目に触れるようになったのは戦後のことだという。現在は国立国会図書館に蔵され、デジタルコレクションで閲覧と画像のダウンロードが出来る。ちなみに、中田祝夫 2006 の「索引」は編者が「序」において「不備があり」「粗慢」だと断るように、单字の音読みですら遺漏が散見する。ここで取り上げた鶴字についても二箇所でクワウの読み仮名が確認できるが、「索引」には採録されない。それはともかく、江戸時代にはまったく世の中に知ら

れなかった文明本『節用集』の影響力はほとんど無視してよい。

- 5) 夢梅は易林本『節用集』の編者・易林と同一人物である（中田祝夫・北恭昭 1976）
- 6) 駐日公使アーネスト・サトウが江戸で購入し、一八八三年に大英博物館に納品された（福島邦道 1977）
- 7) 部首の数を一〇四としてあるが、第二十四番は欠番になっていて二十三から二十五に飛んでいる。したがって、本当の部首数は一〇三である。
- 8) 『文選字引』は家蔵の享保一九年（1734）初刻の安政二年（1855）九刻本によった。国立国会図書館デジタルコレクションに公開されている明治五年版も同様である。

【参考文献】

- 大野晋 1975 『本居宣長全集第五卷』筑摩書房
 岡井慎吾 1933 『玉篇の研究』東洋文庫
 岡井慎吾 1934 『日本漢字學史』明治書院
 語言研究所 1981 『方言調査字表』（修訂本）商務印書館
 小島幸枝 1978 『落葉集総合索引』笠間書院
 佐藤進 2014 「金刀本保元物語の合拗音振仮名と『落葉集』」（『源平の時代を観る』思文閣）
 関場武 1977 「毛利貞齋編『増續大廣益會玉篇大全』」『藝文研究』36（いま関場武『近世辭書論攷』）
 慶應義塾大学言語文化研究所 1994 に収め、その後の調査による諸本の補充がある）
 土井忠生 1971 『切支丹語学の研究（新版）』三省堂
 土井洋一 1986 「解題」『天理図書館善本叢書 落葉集二種』八木書店
 中田祝夫 2006 『文明本節用集研究並びに索引』勉誠出版
 中田祝夫・北恭昭 1966 『倭玉篇研究並びに索引』風間書院
 中田祝夫・北恭昭 1976 『倭玉篇 夢梅本・篇目次第 研究並びに総合索引』勉誠社
 日本語学会 2018 『日本語学大辞典』東京堂出版
 福島邦道 1977 「キリストン版落葉集解説」「キリストン版 落葉集」勉誠社
 福永静哉 1992 『近世韻鏡研究史』風間書房
 山田忠雄 1981 『近代國語辭書の歩み（上下）』三省堂

清末の中国人留学生と「昆虫採集」、 そして浙江省「昆虫局」

SON Ansuk（孫 安石）

一 日中関係史の共同研究

神奈川大学人文学研究所の日中関係史研究会は、中国人留学生史研究という共同研究プロジェクトを進めており、今まで、大里浩秋・孫安石編として『中国人日本留学生史研究の現段階』（御茶の水書房、2002年）、『留学生派遣から見た近代日中関係史』（御茶の水書房、2009年）、『近現代中国人日本留学生の諸相』（御茶の水書房、2014年）、『中国人留学生と「国家」「愛国」「近代』』（東方書店、2019年）の4冊の研究成果を世に送り出している。

いまこの20年間を振り返れば中国人留学生をめぐる研究テーマは多様化し、従来の先行研究では注目されることが少なかった留学生の学費や財政の問題に注目した研究、留学生の日常生活に関する研究、中国人留学生監督処、清国留学生会館などに関連する研究など様々な進展が見られる。

筆者もこのような新しい研究動向に刺激を受けながら、2021年3月に開催された東京大学EAAオンライン・シンポジウム「一高中国人留学生と101号館の歴史」において「清末から民国時期の日本留学案内書の系譜第一章宗祥『日本遊學指南』を中心に」というタイトルの口頭報告を行い、その後『留学生鑑』（啓智学社、1906年、中国語）を取り上げた論稿を

『近代東アジアと日本文化』（銀河書籍、2021年7月）に発表している。

とくに、『留学生鑑』を取り上げた上記の論稿においては、同書が日本国内の学生向けの生活案内書であった堤秋水『學生之寶』（松声社、東京、1902年）を、その体裁、形式、内容の面においてほぼ全面的に翻訳したことを紹介した。そこでは、『留学生鑑』が中国人留学生の日本での生活に必要な情報として訳出している「第一章 立志」以下の日本での住居、衣服、食物、睡眠などのほとんどの部分が堤秋水の『學生之寶』と同一の内容であることを指摘し、「第十五章 読書法」、「第十六章 記憶術」では欧米から輸入された読書法、記憶術という近代的な智識が日本に輸入され、そのあと、中国へ翻訳される過程について若干の考えを述べた¹⁾。

本稿では『留学生鑑』後半の「第十九章 博物採集」が取り上げる昆虫採集という項目が当時の中国人留学生の目にどのように映っていたのか、または、学生が学ぶべき事項として認識されたのか、を紹介したうえで、1910年代の後半に中国の浙江省、江蘇省などで設立された「昆虫局」とはどのような関係があるのかについても、若干触れておきたい。結論から言えば、浙江省、江蘇省などに設立された昆虫局という組織は、農作物の病虫害の予防と駆除を担当した部署で、清末の中国人留学生が関心を寄せていた「昆虫採集」とは直接の関係はない事柄であるが、「昆虫」をめぐる日中の交流の一旦を窺う興味深い内容として書き留めて紹介することにしたい。

二 『留学生鑑』と昆虫採集、植物採集

『留学生鑑』の「第十八章 博物採集」が翻訳の底本とした日本の『學生之寶』は、博物採集の最初の項目として「昆虫採集」を取り上げ、昆虫採集の方法、標本の製法を説明している（【図1】を参照）。例えば、昆虫

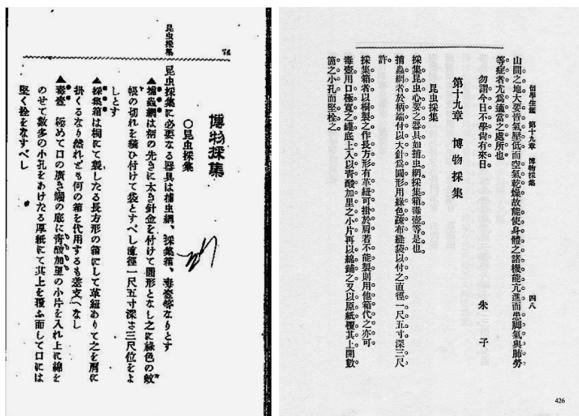
採集の方法では次のように記述している。

「天気晴朗なるとき山野を逍遙し草花の咲きたるところに行けば種々の美麗なる蝶類及び其他の昆虫の居るをみるべし。(中略) 甲虫類は樹木の腐りたる空洞の中に多く居るものなれば之を搜索すべし。また腐敗したる肉類を地上に置けば之に集まり来るものなり」²⁾

中国語の『留学生鑑』が「天気晴朗」で始まる部分から、腐敗した肉類を置けば甲虫が集まることを一字一句違わず翻訳していることには驚くが、このような正確な訳は「標本の製法」にもつづき、蝶類を標本とするときに使う展翅板の製法にもそのまま適用され、板は巾二寸長さ一尺位に切り、その上に巾八分厚さ六七分ほどの板を同じく一尺位に切った二本を並べ、中に溝ある展翅板を作る、としている。

続けて『學生之寶』は、植物採集に用いる採集箱として、ブリキ製の長二尺高五寸の円筒状のものに革製の紐を繋げ携帯することを提示し、専用

【図1】堤秋水『學生之寶』(1902年、左)と『留学生鑑』(1906年、右)の「博物採集」の部分



のブリキ採集箱がない時には茶入または海苔箱を代用しても良いとしているが、『留学生鑑』はブリキの翻訳として「布里幾」を当てながら、その代用品としての茶瓶と海苔箱を使うこともまた正確に翻訳している³⁾。

ここで博物採集に関する日本語の『學生之寶』と中国語の『留学生鑑』を紹介しながら気づくことは、20世紀初期の中国の学生にとって昆蟲採集、植物採集という近代的な生物の分類学が必要であるという認識が中国語で翻訳された『留学生鑑』の内容からうかがうことができるという点である。日本語の『學生之寶』にみえる博物採集（昆蟲・植物・鉱石採集）という考え方方が、明治時代の日本国内に紹介された昆蟲採集に関する智識の蓄積の上に書かれているのは言うまでもない。

松良俊明の「『昆蟲採集』の教育的意義についての一考察」によれば、日本における昆蟲採集の先駆けは江戸時代にみることができるが、捕虫網で捕えた昆蟲を針で刺し、ラベルを付けて保存するという近代的な昆蟲採集が普及したのは明治初期のこと、とくに、1870年代後半から1880年代にかけては、学校の教員が昆蟲採集に熱中し、その影響を受けた子供らの間でも昆蟲採集が流行するようになった、という。その後1881年の「小学校教則綱領」によって、小学校の自然科学系の科目として博物が採用され「動物、植物、金石の標本等を蒐集すること」が明記されることになり、日本の昆蟲採集の大衆化の流れは明治政府によって進められた、という指摘は極めて妥当な評価であると言えよう⁴⁾。

ところが、明治期の昆蟲学においては、民間の流れとして日本昆蟲学会が1917年に設立されたことが重要であるらしい。インターネットで公開された「日本昆蟲学会80年の歩み」によれば、日本で最初の昆蟲学専門の学会が創設されたのは1905年の「日本昆蟲学会」が嚆矢であったが、運営難から4年間で活動を停止し、のちの1917年に農務省林業試験場の矢野宗幹、木下周太、小島銀吉や農科大学の伊藤盛次らの呼びかけで「東

京昆蟲学会」が設立され、これが現在の日本昆蟲学会の出発点である、といふ⁵⁾。

『學生之寶』が学生の余暇活動として博物採集という項目を設けたのは、ちょうどいま述べたような明治時代の影響を色濃く反映したものであり、清末の中国人留学生に日本の生活を紹介する『留学生監』は、日本人の博物採集という余暇活動に大いに興味を持ったことがわかる。

この余暇活動としての昆蟲採集が1910年代の中華民国時期にどのように伝播したのかなどについては、いま一つ不明なところが多いが、中国における1910年代後半の昆蟲をめぐる問題は、農業と病虫害との関係で各地方政府からも重要視され、1922年の江蘇省「昆蟲局」の設立を皮切りに1924年には浙江省「昆蟲局」が、そして、江西省、湖南省、河北省などに相次いで昆蟲局が成立したようだ。

三 中華民国時期の浙江省「昆蟲局」と日本

中華民国時期に各省に設立された「昆蟲局」については、中国でも先行研究がいくつか発表されており、李志英の論考「昆蟲局与農業虫害防治（1921－1937）」の論稿によってその概略をうかがうことができる⁶⁾。

李によれば、1919年頃から江南地方の江蘇省などでは農業、とくに綿業に被害を与える病虫害がたびたび発生し、大幅な生産減少がみられ、その対策の一環として1922年1月には、アメリカ人のカリフォルニア農科大学の Wood Worth を局長兼主任技師とした「昆蟲局」が設置され、アメリカのコーネル大学などに留学した中国人らが加わり、活動を開始したという。その後、1924年には浙江省にも「昆蟲局」が設置され、いよいよ中国でも昆蟲の分類研究、昆蟲の生活研究、殺虫剤の研究などが本格化することになるが、これら農業と病虫害との関連の昆蟲研究においては

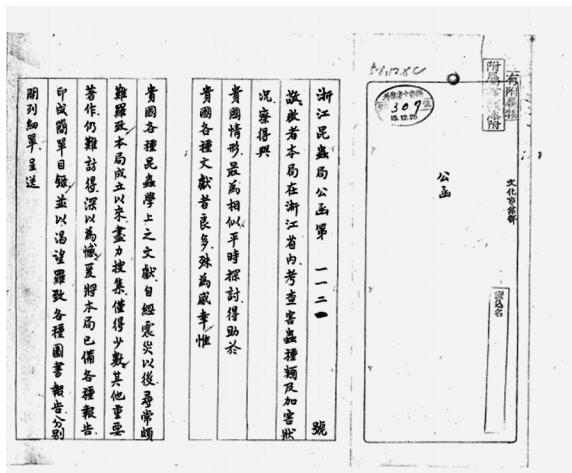
アメリカ留学組が大いに活躍した、という。この時期の昆虫局の活動については、『浙江省昆虫局概要』、『浙江省昆虫局年刊』（1934年）などの資料が現存することから今後、その活動の究明が待たれるが、もちろん、これら昆虫局と日本との関係が全くなかったわけではない。

例えば、日本の外務省外交史料館の資料のなかの「浙江省昆虫局ニ図書寄贈」（請求番号 B05016027800、H-6-2-0-26_004）には、1927年を前後した時期の浙江省昆虫局が、日本の外務省を経由し、日本語による昆虫に関連する印刷物と図書の寄贈を依頼するやり取りが収められている。以下、これらの資料を手がかりに若干、日中の昆虫に関連する図書の寄贈関係について紹介していく。

ことの発端は、1926年12月15日の日付で発信された浙江省昆虫局の公式書簡第1121号により始まる。すなわち、浙江省の昆虫局は、同省内の昆虫の種類及び加害状況を調べていたところ、農作物の被害状況が日本と近似していることから、中国側が保有している日本の病害虫の関連文献目録を提示しながら、昆虫局がまだ入手していない各種の書籍と昆虫標本などを入手したい旨を杭州の領事館を経由して求めてきたのである（【図2】を参照）。

ところが、この要請を受けた日本の外務省は事情をよくつかめず、杭州領事館に浙江省昆虫局の現状などを調査するよう指示を出すことになる。その後、この調査を受けた杭州の領事館警察の末永金之助は、翌年の2月1日付きで杭州領事代理清野長太郎宛に「浙江昆虫局調査復命書」（以下、「報告書」と略称する）を提出している。この「報告書」によれば、浙江昆虫局は、浙江省嘉興県の城内の天寧寺街に位置し、独立建ての間口僅か20尺、奥行き20尺の二階建ての建物で一階に研究室と標本陳列所が置かれるのみの規模極めて小さい組織であったが、局長の費穀祥は事務熱心で相当な成績を挙げている、と評価している。そして、経費の面で、毎

【図2】浙江昆虫局公函第1121号（一部）



(出典：外務省外交史料館「浙江省昆蟲局ニ図書寄贈」、請求番号B05016027800、H-6-2-0-26_004、所収)

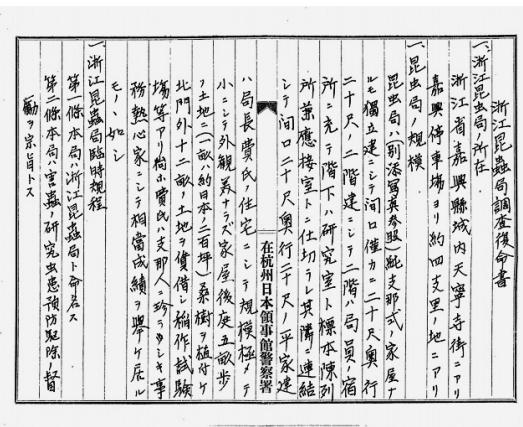
月浙江省財政厅より経費が支給され、毎年の経費は総予算額6024元で運営されていた、という（【図3】を参照）。

しかし、このような恵まれない状況の中でも浙江昆虫局は、優れた事業成果を残していたようで、「報告書」の項目「開辦以来の事業一般」は次のような内容を記載している。

「本局の事業は研究、宣伝及び駆除螟虫の督励を主とし他の害虫及び螟虫駆除の状況は中華農学会報に登載し、其他出版物已に三十余種あり（比較的重要なるものは直接文化事務局に郵送）、更に局員の著作に係る比較的長編数種は経費の関係上自ら印行し能はざるにより上海商務印書館に印刷発行せしめ居れり。本年もまた陸續出版の筈なり」

浙江昆虫局から日本側へ出された昆虫学に関する書籍と標本などの寄贈希望は、以上のような過程を経て、外務省文化事業部において再度、意

【図3】「浙江昆虫局調査復命書」(一部)



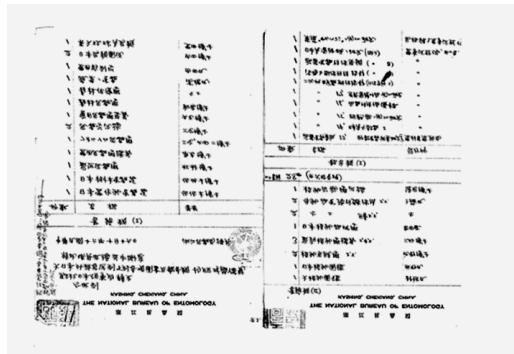
(出典：外務省外交史料館「浙江省昆虫局ニ図書寄贈」、
請求番号 B05016027800、H-6-2-0-26_004、所収)

見が収斂され、外務省文化事業部は1927年10月に昆虫局に対する図書寄贈の予算補助を正式に決定することになる。すなわち、日本側は、浙江省における農作物に対する予防、駆除研究を行う浙江昆虫局が、その研究の範を日本にとっており、参考図書の収集に努めているが、経費が不足していることに鑑み、約239円余に相当する図書を寄贈することにしたのである。

【図4】は、浙江昆虫局が杭州の日本領事館を経由して受け取った図書及び報告書類の詳細を記録した受領証である。

このような昆虫に関する書籍の寄贈をめぐる外務省の対応は、日本の他の官公庁をも刺激したらしい。例えば、農林省農務局は1927年4月に外務省の文化事業部宛に「印刷物送付に関する」という公文を送信している。それによれば、今回の昆虫に関する書籍の寄贈は外務省が推進する日本と中国の文化事業として有意義であることは勿論、中国の農業の発展に日本が貢献できることで、両国の共存共栄という観点からも極めて

【図4】浙江省昆虫局が受け取った書籍の受領証（一部）



(出典：外務省外交史料館「浙江省昆虫局ニ図書寄贈」、
請求番号 B05016027800、H-6-2-0-26_004、所収)

重要なことで、両国の今後の農業部門においても活発な交流を図りたいと
いうことを述べたのち、以下の印刷物を浙江省昆虫局宛に送付したいこと
を伝えている⁷⁾。

- 一 日本産介殻虫科デアスピ亜科に関する研究（其一）
- 一 浮塵子駆除予防指針
- 一 病菌害虫駆除主任技術官協議会要録
- 一 稲熱病に関する研究
- 一 菜蘿サルサムルに関する研究成果
- 一 葡萄害虫「フィロキセラ」と其の防除法
- 一 馬鈴薯葉捲病に関する件
- 一 貯穀害虫及其の駆除予防に関する調査研究成果（第一報）
- 一 病菌害虫防除要綱
- 一 二化性蝗虫駆除予防奨励指針
- 一 日本産実蠅科に関する研究

一 日本産蜜柑蠅の研究

また、北海道農事試験場は、ちょうど時を同じくし、1927年3月には浙江省昆虫局が所蔵していない刊行物の内、報告第17号「キビクビシアブラムシに関する調査」、彙報第27号「蘋果樹病害虫の防除」、彙報第36号「甜菜の病害虫とその防除法」、彙報第39号「大豆の害虫防除」、彙報第42号「北海道農園芸害虫目録」を寄贈することを申し出ている⁸⁾。

結びにかえて

以上、本稿は清末の中国人留学生の日本生活を案内する書籍『留学生鑑』に昆虫採集という項目が取り上げられていることを紹介し、1920年代には江蘇省と浙江省などにおいて病虫害を駆除することを目的に「昆虫局」が設立され、また、日本との間では外務省を経由し、昆虫に関連する書籍と標本などの交換をめぐるやり取りが行われたことについて触れた。

中国人留学生史の研究という分野を開拓したさねとうけいしゅうは、1973年に刊行した『日中非友好の歴史』のはしがきに次のような一文を掲載している⁹⁾。

「この一世紀あまりは、日中間は、ざんねんながら、非友好の連続であった。この非友好を、よく見きわめ、その非友好の原因、根っこを、とりのぞいてしまわなければ、ほんとうの友好はやってこない。中国大陸において、日中両国がはげしくぶつかったのは、日清戦争、五四運動、日中戦争の三つの時代といえよう。」

ところが、この一世紀あまりの非友好の連続であったという定義のなか

で綿々と続いたのは、両国を行き來した留学生の交流であったように思える。この人的交流の流れを保証したのはときの政治であり、ときの経済条件であったことは間違いないが、そこで得られた成果は時には思わぬ方向へと発展したことがあったのではないかろうか。本稿がとりあげた清末の中国人留学生が注目した昆虫採集はその後、中国でどのように広がったのだろうか。また、中国の学校教育には果たして取り組まれることはあったのか、あるいは、学生の夏休みの課題としても定着することはなかったのか。1920年代の中国の各地で設置された「昆虫局」をめぐる日中の交流は、1930、40年代にはどのような展開を見せることになるのか、まだまだ興味は尽きない。

注

- 1) 本稿で取り上げた『留学生鑑』の原文は『中国近代教育文献叢刊』全24冊、浙江教育出版社、2020年3月所収を参考にした。
- 2) 堤秋水『學生之賓』松声社、東京、1902年、74~79頁。
- 3) 『留学生鑑』、前掲書、48~52頁を参照。
- 4) 松良俊明「『昆虫採集』の教育的意義についての一考察」、『京都教育大学環境教育研究年報』、第1号、1993年3月。
- 5) 日本昆虫学会の記述については、<http://www.entsoc.jp/about/ayumi.php> を参照のこと。
- 6) 李志英「昆虫局与農業虫害防治（1921~1937）」、『北京師範大学学報』、社会科学版、2017年、第3期、所収。
- 7) 外務省外交史料館「浙江省昆虫局ニ図書寄贈」、請求番号B05016027800、H-6-2-0-26_004、所収。
- 8) 外務省外交史料館「浙江省昆虫局ニ図書寄贈」、請求番号B05016027800、H-6-2-0-26_004、所収。
- 9) さねとうけいしゅう『日中友好の歴史』朝日出版社、1973年。